

成分添加による尊敬表現の日韓比較

A Japanese-Korean Contrastive Study on Respect-Expressions with Honorific Components

白 同 善

1. はじめに

日韓両言語の敬語表現は、大きく二つの表現形態を有する。一つは、特定語形でもって表現するものであり、もう一つは、敬語成分を規則的に添加して作る表現である。

この二つの表現形態は、尊敬表現において多様な様相を呈する。尊敬表現は、特定語形を持つ尊敬語「おっしゃる・召し上がる」などによって実現される場合と、尊敬成分を添加して作る尊敬語「お話になる・お食べになる」などによって表される場合とからなる。

本稿は、日韓両言語の尊敬表現に添加される成分、つまり、尊敬成分の形態とその機能を比較対照するものである。以下、両言語の尊敬成分をそれぞれ取り上げ、それによる尊敬表現を用言と体言とに分けて比較する。その後、韓国語における特殊な尊敬成分である尊敬助詞について一考を加える。

2. 用言に添加する尊敬成分の比較

日本語には、動詞・形容詞・形容動詞などの用言に添加する尊敬成分がそれぞれ特定の形態として備わっている。たとえば、動詞には「おーになる」「れる・られる」などが用いられ、形容詞・形容動詞には接頭辞「お」が一般に用いられる。

これに対して、用言に添加する韓国語の尊敬成分は非常に単純である。韓国語において、成分添加による用言の尊敬表現はその使用頻度が一際目立つけれども、

その形式は単一形態でほぼまかなっている。

韓国語の用言に添加する尊敬成分は尊敬補助語幹 shi で代表される。これは韓国語の尊敬成分で最も生産的なものであり、動詞・形容詞を問わず用いられる。この他には、尊敬動詞に援用される補助動詞 kyeshida が一つ存在するのみである。shi は韓国語の尊敬表現において欠かせない非常に貴重な成分である。なお、これは先語末語尾または尊敬接尾辞として扱われる場合もあるけれども、本稿では補助語幹として扱う。

2.1 動詞に添加する尊敬成分

動詞に添加する日本語の尊敬成分は、「お・ごになる」「れる・られる」に代表される。形式動詞「お・ごになる」が本来の尊敬成分であり、助動詞「れる・られる」は受身形に援用された尊敬成分であると言える。「お・ごになる」は、敬語動詞に対応する普通語を除くほとんどの動詞に適用することができる。つまり、これは敬語動詞（たとえば、「おっしゃる」）に対応する普通語（たとえば、「言う」）には適用できない（たとえば、「お言いになる」）。なお、「れる・られる」は敬語動詞に対応する普通語にも適用できる。

動詞に用いる日本語の尊敬成分は、上記のもの以外にも多様である。たとえば、「お・ごなさる」「ーなさる」「お・ごーだ」「お・ごーです」「お・ごーあそばす」「お・ごーくださる」等がやはり生産的な運用幅を持つ。形式動詞として用いられるこれら尊敬成分の中で、「お」が前につくものには、そのほとんどが動詞の連用形に適用されるという特徴がある。「お飲みになる」「お休みなさる」「お飲み（なの）」「お喜びだろう」「お過ごしでしょうか」「お越しあそばせ」「お越してください」など。なお、「ーてくださる」「ーていらっしゃる」など、補助動詞を尊敬成分として用いる表現形態も日本語には多様であるが、尊敬補助動詞は本稿では考察の直接の対象とはしない。

韓国語の動詞に添加される尊敬成分は先述の shi である。日本語の尊敬形式動詞の働きをする韓国語は、これしかない。したがって、成分添加による日本語の尊敬表現は、韓国語では特定語形の尊敬動詞がなければ、すべて shi による表現に置き換えられる。韓国語固有の尊敬動詞は六語しかないので、shi はほと

んどすべての動詞に添加できることを意味する。

その用例を見よう。たとえば、mandūlda (作る) は mandūshida (お作りになる)、「到着hada (到着する)」は「到着hashida (ご到着なさる)」のようになる。前者は固有語であり、後者は「漢字語+する」動詞であるが、そのいずれにも難なく使える万能性がある。日本語の場合は、固有語には「おーになる」が付きやすく、漢字語には「ごーなさる」が付きやすいという違いがあるのとは区別される。「れる・られる」は「読まれる・到着される」など、固有語・漢字語の区別なく使える許容範囲を持つことから、この方が韓国語の shi に最も近い性質を持っているとも言えよう。

この尊敬補助語幹は、特定語形の尊敬動詞に対応する普通語に付加して表現することも可能である。しかし、このような表現は人物に属する事柄に関して用いるのが本来の正しい用法である。尊敬動詞があるにも関わらず、人物を直接遇する場合に添加成分を用いる表現は一般性がなく、教養度の低い文になりやすい。

ただし、昨今の言語行動においてはこの区別も明確なものではなくなりつつある。たとえば、mökta (食う) に対する尊敬表現は、尊敬動詞 chapsushida (召し上がる) が適格であるが、成分添加による mögūshida (お食いになる；食べられる) が用いられる場合がある。このように、韓国語で従来誤用とされてきた、尊敬動詞に対応する普通語に尊敬成分を添加して人物を遇する用法が普及しつつあることは、尊敬動詞と成分添加による表現との区別が曖昧になっていることを示すものであり、一つの転換期に來ていると考えられる。

尊敬動詞が存在する場合に、それを用いた方が自然な表現となるのは日本語でも同様である。日本語でも尊敬動詞に対応する普通語には、本来の尊敬成分である形式動詞「おーになる」が適用できないからである。

ただし、日本語には尊敬成分が多いので、その運用の面から尊敬動詞と成分添加による尊敬表現との互換性は、日本語の方が韓国語のそれより許容度が高く、韓国語の方は制約が強いと言える。「いらっしゃる」(＜行く) という尊敬動詞の代わりに「おいでになる・おこしになる」など、別の尊敬動詞があるのみならず、「行かれる・お行きなさる・お行きあそばす」など、日本語にはその代用成分が豊富だからである。

ところで、韓国語の成分添加による尊敬表現の特殊な用法を一つ付け加えたい。

一般的に尊敬成分は、話し手が目上の行動主を高める場合に使われるが、それとは逆に目下に用いられる用法、つまり、行動主が話し手より下位者である場合にも尊敬成分が添加されることがある。皮肉の目的で用いる場合の表現を指すものではない。

たとえば、祖父が孫に対して、*appanūn ajik andorao-shi-ōnni?* (お父さんはまだ帰っていらっしやらなかったのか) と表現する場合がある。これは正しい用法である。ここで、話し手である上位者(祖父)が素材の人物である下位者(息子)を高めているのでは、もちろんない。聞き手と素材の人物との関係を考慮して、聞き手(孫)の立場から表現したものである。日本語にもこのような表現がないわけではないけれども、括弧の中に直訳で示した表現は一般的ではなかろう。ただし、日本語においても「お父さんはまだ帰ってないのか?〔祖父→孫〕」のように、呼称表現には素材の人物が話し手より目下であっても、聞き手と素材の人物との関係を考慮して目上性の表現がなされることはある。なお、話し手より目下の、他人の上位者のことを言うときに尊敬表現が用いられるのは両言語で共通する。

尊敬補助語幹の使い方において問題にされる表現がある。それは家庭の中で、話題の人物より聞き手が上位の場合の使い方である。日本語では身内敬語がほとんど使われないから特に問題はないが、韓国語では身内の敬語遣いが厳しく、それを間違えると非常識と言われる。次の場合、(1)が正しい用法であり、(2)は不適格文である。

- (1) a) *abōnim, hyōng-i torawassōyo.* [息子→父]
 b) お父さま、お兄さんが帰りましたよ。
- (2) a) **abōnim, hyōngnimi torao-shi-ōssōyo.* [同上]
 b) *お父さま、お兄さまがお帰りになりましたよ。

これは絶対敬語と相対敬語および身内敬語の問題である。ただし、不適格である(2a)のような表現が現在相当使われており、まだ議論が進められている。成者徹(1985:57)は、(2a)のような表現を「上位聴者制約」と名付けて非文処理している。成者徹の上位聴者制約とは相対敬語と似通った用法を指しているが、上位

聴者制約だけでは説明が不十分である。韓国語でのこの制約は、身内における敬語遣いで認められる現象であって、ヨソの人間が介在する場合の言語行動では認められないからである。したがって、上位聴者制約は「身内上位聴者制約」と言い改めなければならない。つまり、これは身内敬語における相対敬語現象で、日韓両言語で共に相対敬語法が規範とされるところである。

一方、他人の身内に関する表現では、素材の人物より聞き手が上位者であってもその素材の人物に関して尊敬表現を用いるのが規範である。つまり、上記とは逆の表現が規範であって、次の(4)のような表現が妥当である。

(3) a) ?adürün hakkyoe kassöyo? [聞き手; ヨソの人]

b) ??息子は学校へ行きましたか。

(4) a) adünimün hakkyoe ka-shi-önnayo? [同上]

b) 息子さんは学校へ行かれましたか。

ここで、(4)が通用し、(3)が通用しにくいのは、他人の身内との関係でも両言語で相対敬語法が規範であることを示すものである。つまり、身内敬語においては、聞き手より下位者を高めないとところに相対性があり、他人との関係においては、聞き手より下位者を高めるところに、素材の人物と聞き手との相対的關係が考慮されるのである。ただし、韓国では(3a)のような表現も頻用されるが、これは話し手と聞き手との関係如何によるものである。日本語においても(3b)が用いられる場合は、話し手と聞き手との親密度によるであろう。親疎関係によって、規範は流動的であると言える。

2.2 形容詞に添加する尊敬成分

日本語の形容詞の尊敬表現には、接頭辞「お」が添加される。また、形容動詞にも接頭辞が用いられるが、固有語には「お」がつきやすく、漢字語には「ご」が対応する場合が多い。形容詞のほとんどに「お」が添加されるのは、形容詞のほとんどが固有語でできているからである。形容詞にも形容動詞にも、動詞に用いる尊敬成分は用いられない。

これに対して、韓国語の形容詞に用いる尊敬成分には、動詞の場合と同じく、尊敬補助語幹 *shi* が対応する。韓国語では形容詞と形容動詞の区別をしないので、形容詞には日本語の形容動詞も含まれる。受け手を形容する場合の尊敬表現として、この *shi* が生産的に用いられる。たとえば、*pappūda* (忙しい) は *pappūshida* (お忙しい), *arūmdapta* (美しい) は *arūmdaushida* (お美しい) と表現される。前者は母音語幹、後者は子音語幹の形容詞への添加である。

また、*shi* は「*hada* 形容詞」にも添加される。たとえば、*myōnglanghada* (朗らかだ) は、*myōnglanghashida* (朗らかでいらっしゃる) となるが、これは漢字語による名詞相当語「明朗」に用言構成成分 *hada* (直訳では「する」、意味的には形容動詞の語尾「だ」に当たる) が添加されたものである。なお、*hullyung hada* (偉い) など、固有語の「*hada* 形容詞」にも *hullyunghashida* (お偉い) のように *shi* が添加される。

これは、韓国語においても意味的には形容詞と形容動詞が存在することを示唆してくれる。日本語の形容詞の大多数が固有語であることと同じく、韓国語の形容詞も「*hada* 形容詞」以外は、ほとんどすべてが固有語による形容詞であるという共通性を持つ。つまり、日本語の形容詞は韓国語の漢字語による「*hada* 形容詞」以外の形容詞と対応し、韓国語の漢字語による「*hada* 形容詞」は日本語の形容動詞の性質を持つものといえることができる。ただし、「*hada* 形容詞」であっても、漢字数によって性質が異なることがある。その関係を次に示そう。

たとえば、「勇敢*hada* (勇敢だ)」「幸福*hada* (幸福だ)」など、二音節の漢字語に *hada* が付いたものには、その尊敬形を日本語にする際、そのまま「お」を付けることはできない。つまり、「勇敢*hashida*」は「ご勇敢だ・勇敢でいらっしゃる」に、「幸福*hashida*」は「ご幸福だ・幸福でいらっしゃる」になり、「お勇敢だ」「お幸福だ」とは言えない。もちろん、これらを固有語にして「お勇ましい・お幸せだ」とすることは可能であるけれども、いずれにせよ、元の漢字語に「お」を付けることはできない。このように、形容動詞の性質を持つ韓国語の形容詞の尊敬成分を日本語にすると、「お」よりも「ご」、または「一でいらっしゃる」の形になる可能性が非常に高くなり、そうしないと、形容動詞より一般的な形容詞に言い替えられる可能性が高い。

これに対して、「強*hada* (強い)」「順*hada* (優しい)」などは漢字一文字に

hada が付いたもので、日本語の尊敬形では「お+固有語」に直される可能性が非常に高くなる。つまり、「強hashida」は「お強い」, 「順hashida」は「お優しい」となり、一音節の漢字語によるものには、「お」が対応する。

ここで、漢字二文字による韓国語の「hada 形容詞」は日本語の形容動詞に相当し、漢字一文字による「hada 形容詞」は日本語の形容詞に相当すると細分することができる。

いずれにせよ、韓国語の尊敬成分 shi は、形容詞にも自由に適用される。つまり、韓国語では動詞と形容詞への添加成分が同一である点で日本語と比較される。日本語の場合、「お・ごになる」「れる・られる」など、動詞に用いる尊敬成分は動詞にしか使えないという制限があることは述べた通りである。

日本語の尊敬接辞「お・ご」は非常に便利であるけれども、単語の種類による使い分けが為されているうえに、「お」は「お」で始まる語には付けにくいなどの制約がある。また、「お若い」「お静かだ」など、接頭辞「お・ご」を用いた表現は、尊敬表現のみならず、美化表現または丁寧表現としての機能をも備えているのに対して、韓国語の場合は尊敬成分が添加されればすべて尊敬表現となる。

韓国語の shi にも制約はある。たとえば、日本語では、(5a)(6a)のように人間そのものの状態を表す場合ではなくても「お」が使えるが、このような表現に韓国語の尊敬成分 shi を付加すると非文となる(5b,6b)。ただし、(7)のように人間のある心的状態を表す場合には用いることができる。

(5) a) (天気が) お暑いですね。

b)**(nalssiga) tōshigunnyo.*(←tōpkunnyo)

(6) a) (品物が) お安いですね。

b)**(mulgōni) ssashigunnyo.*(←ssagunnyo)

(7) a) *nalssiga ch'am tōshijiyo?* (天気がとてもお暑いでしょう)

b) *maūmi ch'am nōlbūshigunnyo.* (心がとてもお広いですね)

つまり、韓国語の形容詞に用いる尊敬成分は、人間のある状態に関してのみ用いられる反面、日本語の形容詞に用いる尊敬成分は、人間以外のものにも用いられるという許容範囲を持つ。ただし、日本語で自然現象などを表す(5a,6a)のよ

うなものは、尊敬表現というより美化表現または丁寧表現とみた方が適切であるとも言える。

2.3 存在詞および指定詞に添加する尊敬成分

日本語では、存在を表す「ある・いる」は動詞形であるので、動詞に用いる尊敬成分が対応し、指定を表す「だ・である」には形容動詞に用いる尊敬補助動詞が一般に対応する。

韓国語では、存在詞と指定詞をそれぞれ一つの品詞として扱うのが普通である。これらに添加する尊敬成分は、やはり尊敬補助語幹 *shi* である。

存在詞の用法から見てみよう。普通形存在詞 *itta* (ある, いる)・*öpta* (ない, いない) に対して、成分添加による尊敬形は, *issüşhida* (おありである, ??いらっしゃる)・*öpsüşhida* (おありではない, ??いらっしゃらない) である。ただし、これは人物を直接遇するときには用いられず、事物・事柄などを表す場合に用いるのが本来の正しい用法である。

韓国語の普通形存在詞は、人物と事物による「ある・いる」の区別がないので、人物か事物かの如何に関わらず同じ形態が用いられる。その敬語形において、人物か事物かによる使い分けがなされ、人物そのものに対しては特定語形の尊敬動詞(尊敬存在詞)が用いられる。したがって、成分添加による尊敬形存在詞は、(8)のように人物に属するものに用いるものであり、(9)のように人物そのものにこれを用いることは不適格な文となる。人物の存在を表す(9)のような表現には、尊敬動詞 *kyeshida*・*an-gyeshida* を用いなければならない。

(8) a) *neil shigan chom nel su issüşhiöyo?* (明日お時間おありでしょうか)

b) *ton chom öpsüşhiöyo?* (お金ちょっとお持ちではないでしょうか)

(9) a) *??kübunün issüşhinnida.* (その方はおありです)

b) **sönsengnimün öpsüşhinnida.* (先生はおありではありません)

(9)のように、人物そのものの存在に尊敬成分の添加による存在詞を用いる表現は、実際の言語生活では耳にすることもあっても、やはり誤用である。誤

用の中でも比較的抵抗の少ないものは、(9a)のように話題の人物が話し手と聞き手に直接の関わりが少ないような場合の表現であり、(9b)のように直接的な関わりが深い場合の表現は抵抗が大きくなることはある。

次は指定詞である。普通形指定詞 *ida* (だ、である)・*anida* (ではない) に対する尊敬形指定詞は、*ishida* (でいらっしゃる)・*anishida* (ではいらっしゃらない) で、やはり尊敬補助語幹が対応する。これには特定語形の尊敬指定詞はない。したがって、人物・事物・事柄に関わらず同じ形態が用いられる。

日本語でも成分添加でもって尊敬形指定詞の表現を為すが、尊敬補助動詞によって実現される場合が一般的である。普通形指定詞に尊敬形式動詞を添加する「であられる、でいられる」「であられない、でいられない」は現代語では一般的に用いないであろう。ただし、「大変お忙しい毎日であられると思います、暇をみつけて是非読んで下さい。(94年6月、私信、下線筆者)」のような表現に出会ふことはある。やや古風な表現ではあるが、日本語にも普通形指定詞に形式動詞を添加する尊敬形態が存在することを示してくれるものである。

日韓両言語の用言の尊敬表現は、成分添加による表現が多用される点では共通である。しかし、以上見てきたように、その形式において、日本語は各用言毎に用いる非常に豊富な尊敬成分を備えているのに対して、韓国語の尊敬成分は甚だ単純であるという極端な対照を為しており、その甚だ単純な形式でもって日本語の尊敬成分のすべてを賅っているのである。

3. 体言に添加する尊敬成分の比較

日本語には用言に用いる尊敬成分と優劣を付することができないほど、体言に用いられる非常に生産的な尊敬成分がある。接辞「お・ご」に代表される体言に用いる尊敬成分は、用言のそれに比べて形式は単純なものの、多彩な機能を発揮する。尊敬接辞は韓国語では普通見られない敬語成分であり、日韓敬語運用において最も大きな形態的・意味的相違点が見られるものの一つである。

3.1 接頭辞として用いられる尊敬成分

日本語の接頭辞「お・ご」は、形容詞および形容動詞の尊敬成分としてのみならず、名詞にも非常に生産的に用いられる。「お+名詞」も「ご+名詞」も同じような働きをするが、周知の通り、前者は「お酒・お顔」のように主に和語（固有語）に付き、後者は「ご意見・ご専門」のように主に漢字語に付くもので漢字そのまま用いて「御」と書く場合もある。ただしこの区別は絶対的ではなく、例えば漢字語であっても、「お電話、お愛想、お食事、お写真、お帽子」のように習慣的に「お」が付く場合もある。また、和語の場合でも特に副詞のような単語には、「ごゆっくり、ごもつとも」のように「ご」が付く場合もある。

尊敬接頭辞「お・ご」は、美化表現に用いられる「お・ご」と区別しにくい場合も多い。しかし、受け手に直接関わる表現である場合は尊敬接辞としての機能が優先的であると判断される。つまり、「お・ご」が「あなたの」の意味で解される場合は尊敬成分として機能すると考えられる。このように、日常生活で頻用される語につく尊敬接頭辞は、それを取り除いても語として成り立つので、純粹な接辞としての役割を果たしていると言える。

これに対して、次のようなものを見よう。日本語には「お・ご」と類似した接頭辞に、非生産的ではあるが、「おん・おおん・ぎよ・み・おみ」など多彩なものが備わっている。

- (10) a) 【おん】 おん中、おん方、おん曹子、おん礼、おん身
 b) 【おおん】 おおん事、おおん衣(ヰ), おおん時、おおん身
 c) 【ぎよ】 ぎよ意、ぎよ慶、ぎよ物、ぎよ衣
- (11) a) 【み】 み心、み世、み子、み仏、み姿、み代
 b) 【おみ】 おみ足、おみ輿、おみくじ、おみ帯、おみお付け

このようなものは、尊敬接頭辞の有無によって語が成り立つ場合とそうではない場合とがある。したがって、「お・ご」とはその性格に一線を描くものである。しかし、接辞としての機能が明確なので、接辞の添加による表現と見なした方がより妥当であると判断される。

これに対して、韓国語には尊敬接辞による表現は非常に希である。その貧弱さのために従来、韓国語には尊敬接頭辞がないと一般に言われた。

しかし、全くないわけではなく、古典的ではあるが、韓国語にも体言に用いる尊敬接頭辞が存在する。上記日本語の接辞に当たる漢字は「御」であるが、これに当たる韓国語に同じく漢字接頭辞の「御」が存在するのである。この「御」は、日本語のようにいくつかの読み方があるのではなく、韓国語の漢字の一字一音原則に従い、その読みは *ö* だけである。また、日本語では「おみ・おみお」のように、「御」を二つ・三つ重ねたものもあるが、韓国語では単独で用いられる。

この *ö*〔御〕は漢字語の前に付けて、王朝時代の国王の行為やその所有物を意味し、畏敬の念を表す尊敬接辞である。たとえば、王様の「前」は *öjön*(御前)、王様の「命令」は *ömyöng*(御命)、王様の画像や写真は *öjin*(御眞) といった具合である。接頭辞によって、普通名詞の前半部分が省略されて一語化しているとも言える。

これらの語は接辞なしでは機能しない。つまり、この接辞が接続されて初めてその意味が生きてくる。したがって、日本語の「お・ご」とは性質が異なる。しかし、日本語でも(10)のほとんどが接辞なしでは用いられないけれども、接辞の要素を接辞ではないと言えないのと同じく、韓国語の「御」もやはり接辞であると言わざるを得ない。つまり、韓国語のこの尊敬接辞による表現は日本語の(10)(11)のような性質のものであると言える。二語に分離できなくても、接辞としての統一性があるので、紛れもない接辞による表現である。韓国語のこの種類の例をいくつか列挙しておく。

(12) 御駕・御庫・御宮・御極・御覧・御令・御名・御寶・御服・御府
御賜・御床・御壘・御所・御手・御食・御押・御筵・御宇・御衣
御印・御殿・御製・御題・御座・御酒・御旨・御札・御帖・御寝
御榻・御筆・御啣・御鞋・御患

(13) 御軍幕・御覧件・御賜花・御乗馬・御宸筆・御齋室・御筆閣

これらは、特殊な場合にしか用いられない。この場面の制約と(12)のように漢字二文字でできている語は接辞を分離できないという点から、今まで「御」は尊敬接辞として扱われなかったのである。実際現代では時代劇とか小説など、またはふざけた言い方としてしか用いられないという制限がある。しかし、その用法

に制限があるにせよ、尊敬接頭辞であることには間違いない。したがって、韓国語には「御」のような尊敬接頭辞がないと断定していた従来の説には誤りがある。

日本語でも、韓国語の öse (御璽), または okse (玉璽) のようなものは、「御璽 (キョジ)」、または「玉璽」といって、天皇の印章の意で用いられるらしい。その他にも御衣(ウヅ)等のような特別敬語が用いられた痕跡が見える。このような特殊な敬語に関して西田(1987:402)の次のような指摘がある。

日本における皇室に関する敬語に、「玉体」「聖体」「龍顔^{リョウガン}」「宝算」「聖寿」「叡慮^{エイロ}」「宸襟^{シンキン}」「懿旨^{イジ}」等、古代中国語に由来する漢語が用いられていたように、李王朝時代の朝鮮、王政時代のベトナムでは、国王に関する特別の敬語として、漢字で書けば同じになる古代中国語に由来する語を用いていた。

しかし、現代の日本語ではこのような特別敬語はほとんど用いられない。いわゆる皇室敬語でも用いられなくなった。敬語に関する基本的な指針をまとめた『これからの敬語』(1952)にも、「玉体・聖体」は「おからだ」、「天顔^{テンガン}・龍顔^{リョウガン}」は「お顔」、「宝算・聖寿」は「お年・ご年齢」、「叡慮^{エイロ}・聖旨^{セイジ}・宸襟^{シンキン}・懿旨^{イジ}」は「おぼしめし・お考え」のような表現をするのが好ましいとされている。

このように平明・簡素な用語に置き換えられるのは、日本語の尊敬成分「お・ご」に一般性があるからである。すなわち、韓国語の「御」と違って、日本語の「お(御)」は非常に身近なものとして現代でも多用されており、それが用語の言い替えに大きな役目を果たしている。これが韓国語との大きな違いである。つまり、日本語では古語の尊敬成分の形態が現代語に受け継がれているのに対して、韓国語ではほとんど断絶されているのである。これは韓国の歴史がほとんど断絶性を見せるのと無関係ではあるまい。

ところで、日本語の体言に付く「お・ご」の用法において、統語的な観点から「尊敬表現」と「謙讓表現」との機能があることは留意すべきであろう。「お手紙・お先・お話・ご返事・ご挨拶」など、受け手を前提とする表現に見られる現象である。これらは全く同じ形態であるにも関わらず、その敬意の示し方は逆の場合がしばしばある。

たとえば、「先生のお手紙」の「お手紙」は「先生がお書きになった手紙」に

対して高めて表現する尊敬表現であるが、「お手紙を差し上げる」のそれは「話し手が書く手紙」に対する謙讓表現である。後者の「お」は、「行為の掛かり先への配慮」から用いられるけれども、丁寧表現および美化表現としての機能も備えていると言えよう。その他も同様である。

韓国語では尊敬表現と同じ形態で謙讓表現を為す場合は一般にないが、尊敬接頭辞 *ö*〔御〕はこのような性質を持つ場合がある。たとえば、「御供・御供米・御白米・御膳・御水」のような表現は、君主を直接表現するものではないが、それに関わるものとして「御」を付けて特別なものであることを示すものである。*ögong*（御供）と言えば「王様に物を捧げること」を意味し、「行為の掛かり先への配慮」を示す。韓国語の「御」が現代語においてその用例が非常に廃れてきたとは言え、元来、日韓両言語の体言に用いるこの要素が同じ出発点を持つことを示してくれるもので、非常に興味深い現象である。

なお、韓国語の特別敬語 *öjön*（御前）と同じように、日本語でも「お前（御前）」という二人称代名詞が元々は特別敬語として、「神仏や貴人の「御前」の意」で用いられていた。同じく「御前」と書いて「おんまえ」と読むと敬意が一層高くなる。ただし、今日、「おんまえ（御前）」の使用が残されているのは手紙の脇付けぐらいであろう。文化庁(1978:75)には、(手紙の)「御前」は「文字どおりその前に置くという意味であるが、受取人が目上の身内や女性の場合に用いる。同種の語に「御前に」「御許おんもと」「みもとに」「みまえに」などがある」とある。この例から日本語の時代による意味の下落が韓国語のそれより早いことを窺い知ることができる。逆に言えば、韓国語は古典的な用法はあくまで古典的な用法として固執するのに対して、日本語の方は古典的な用法を意味の変化を持たせて現代語でも受け継いでいるとも解釈できる。

3.2 漢字接辞によるその他の尊敬成分

生産性はないが、次のようなものも尊敬成分として機能を発揮する。日本語だけにその用例が見られる「貴家・貴殿」「芳志・芳恩」など、韓国語だけに用例が見られる「玉韻」のような、例外的なものを除けば、次の各対は両言語でほぼ対応する。

- (14) a) 【貴】 貴社, 貴賓, 貴宅, 貴下, 貴意, 貴婦人
 b) 【高】 高見, 高説, 高評, 高名
 c) 【令】 令息, 令嬢, 令弟, 令愛, 令婦人
 d) 【尊】 尊顔, 尊体, 尊宅, 尊父
 e) 【芳】 芳名, 芳命
 f) 【玉】 玉稿, 玉音, 玉筆, 玉体
 g) 【大】 大兄, 大人(タイジン・ウシ), 大夫人
 h) 【賢】 賢察, 賢慮

このようなものは漢語からもたらされたもので日韓両言語でほとんど同じく機能する。「貴婦人・令婦人・大夫人」など、三音節語は添加成分無しでも用いられるが、その他の二音節語は添加成分無しには用いられないか本来の意味が変わってしまう(韓国語の「宅」は例外)。したがって、これらは韓国語の「御」と同じように、接辞にするには無理もあるが、尊敬成分としての共通性が見られるので接辞と見なされる。

接辞による二音節語が接辞を分離しては用いられないことの波及効果が日本語に見られる。日本語では、「高見・令息・尊顔・芳名」など既に尊敬表現となっているものに、さらに「御高見・御令息・御尊顔・御芳名」などと尊敬接頭辞を付け加える場合がある。過剰敬語ではあるが、接辞による二音節語が一語に融合された語として認識されていることから起因するものであると考えられる。「貴夫人・令夫人」など三音節語には「御」をつけて、「御貴夫人・御令夫人」とは言えないことからそれを窺い知ることができる。

韓国語でもこれらが一語化されてはいるものの、このような二重敬語はない。それは日本語の「お・ご」のような体言に用いられる便利な成分が、現代韓国語では一般的に用いられないことにその理由を求めることができる。

なお、日本語の尊敬接頭辞のいくつかは尊敬接尾辞成分としても用いられるという特徴を有する。たとえば、「御」は「親御・娘御・伯父御」のように、「貴」は「兄貴・姉貴」のように用いられ、古典的な用法として、「ぎよ」は「還御」「出御」「入御(シユキョ・ニユキョ)」のように尊敬接尾辞としても用いられる。

3.3 接尾辞として用いられる尊敬成分

接尾辞としての尊敬成分は、主に呼称表現に用いられる。先述した両言語の尊敬接頭辞は、機能はともかく、形態の比較はやりやすい。それに対して、接尾辞は両言語で形態そのものが違う場合が多いので、対応させることが非常に困難である。

接尾辞として用いられる日本語の尊敬成分として最も一般的な「さん」は、その使用範囲における万能性を誇る。目上の人にも目下の人にもまた相当年齢の離れている場合でも使うことができる。

これに対応する韓国語は、日本語ほどの自由性はないが、比較的一般的なもので ssi〔氏〕が挙げられる。これも目上・目下を問わず用いられるが、年齢差の大きい目上の人、または未成年者には用いられないという制限がある。

成人した人に対する用法にも、微妙な差がある。「さん」は一般的に苗字に用いるが、名前にも姓名にも用いることができる。ssi もそれらの機能を持つと、一応、言える。しかし、名前か姓名に付けて表現するのが一般的な用法である。苗字だけに用いると敬意度が遥に落ちてしまう。苗字に ssi を付けて呼びかけたり指し示す表現は、使用者が被使用者に言う場合に主に用いられてきたもので、例えば家主が庭師に用いるようなものである。したがって、苗字に ssi を付けることは上位者が下位者を呼びかけるような感じを与えかねない。

次に、一般用語として生産性があり、且つ最も良く使われる最上級尊敬接尾辞として、韓国語は nim を日本語は「様」を挙げることができる。両方ともやや形式張った表現であるが、比較的良く用いられるものである。

尊敬接尾辞運用の相違点が明確に現れるのは、職位名への添加である。日本語では職位名がそのまま敬称になるので、「課長」「部長」などの職位名に「さん」または「様」を付けないのが正しい表現とされている。これに対して、韓国語では職位名だけでは敬意を普通表せない。したがって、必ず尊敬接尾辞 nim を付けなければならない。面前の上役を尊敬接辞無しで呼びかけることはできない。例えば、「教授・部長」などはあくまで職位名であり、その職位に就いている人を指す場合には、「教授nim・部長nim」のように「様」に当たる nim を必ず付

け加える。ただし、当の本人がいない時にはその限りではない。

なお、日本語では職位名に「さん」も「様」も形態的には付加することが可能であるが、韓国語では nim だけが用いられ、「さん」に当たる ssi を添加することはできない。

「様・nim」は、親族名称においても「お兄様・兄nim」のように、両言語で共に用いられ、敬意を高めるのに役立つ。ただし、韓国語の親族名称は、職位名の場合とは違って、必ずしも nim を付けなければならないという規範はない。付けないよりは付けた方が敬意が高くなることは言うまでもないが、尊敬接辞無しの親族名称だけでも充分用いられる。日本語の親族名称が、尊敬接辞無しでは用いられないのと対照的である。

このことは、日韓両国の、社会的関係と親族的関係による尊敬接尾辞運用の好対照を示してくれる。つまり、社会的関係における目上性の呼称を日本語では敬称として認識し、尊敬接辞が不要である反面、韓国語ではそれが敬称として一般に機能せず、尊敬接辞を要求する。一方、親族名称においては、日本語は尊敬接辞を要求するのに対して韓国語ではそれが必要条件ではない。

この他にも日本語には尊敬接尾辞が豊富に備わっている。たとえば、「殿・氏・うえ（父上）・がた（先生方）・かた（あの方）・御中・各位・御（姉御）・貴（兄貴）」など。また、「おーさん（お医者さん）・おーさま（お客様）」のように、接頭辞と接尾辞が併用される場合もある。なお、親愛語として「ちゃん・ちゃま」などが用意されている。

これに比べれば韓国語の尊敬接尾辞は単純である。上記のうち、日本語と同じ形態で一般に用いられるものは、「氏」と「各位」のみである。ただし、韓国語の「氏」は呼称表現として多用されるが、日本語の「氏」は書き言葉的で、話し言葉では用いられない。この他には、bun（かた）・「貴中」（御中）が一般に用いられ、手紙の宛名に用いる「様」には「貴下」が対応する。

4. 韓国語の尊敬助詞と日本語

日韓両言語の尊敬成分のうち、著しく相違点が見られるものの一つに韓国語の尊敬助詞がある。両言語共に助詞によって文法関係を示し、それが膠着語を成り

立たしめる要因であることはよく知られている。ただし、日本語では普通助詞と尊敬助詞の区別がないのに対して、韓国語では助詞の尊敬形が存在するという特徴を有する。以下、現代韓国語において一般に用いられる尊敬主格助詞と尊敬与格助詞について比較する。

4.1 尊敬主格助詞と日本語

尊敬主格助詞は、普通主格助詞 *ga* と *i* に対する尊敬形 *kkesõ* を指す。普通主格助詞は、前の音節が母音で終わるか子音で終わるかによる二つの形態があるが、敬語形においてはその区別がない。

このように、韓国語の主格助詞は普通形と尊敬形の区別が明確であるので、少なくとも、形態の面における敬意ははっきりと示される。これに対して、日本語の助詞は普通形と尊敬形の対立がないので、韓国語の普通主格助詞も、尊敬主格助詞も、日本語にすれば同じ形態の「が」となる。

ただし、日本語に尊敬主格助詞の形態は存在しないけれども、統語構造によって同一の形態の意味が変わってくると思われる。たとえば、次の(15a)の「が」と(15b)の「が」の意味合いは違うのではないかと考える。

(15) a) 先生が講義をしている。

b) 先生が講義をしていらっしゃる。

つまり、(15a)の「が」は「ている」と呼応し、敬意が内包されていない。しかし、(15b)の「が」は「ていらっしゃる」と呼応し、話者の敬意による深層心理が働いていると解釈できる。同様な解釈で、同じ主語（先生）でも、前者より後者の方が敬意度が高いと言える。

なお、古風な表現で、*kkesõ* をもっと高める極尊称 *kkeosõ*, *kkeopsõ* が存在する。これも尊敬主格助詞ではあるが、*kkesõ* の異形態で、現代語ではほとんど運用例が見られない。

ところで、*kkesõ* はしばしば *kkesõnün* と混用され、主格をもっと強調する意味で使われる場合がある。しかし、厳密にはその意味合いが違うものである。

kkesónŭn は、トピックを表す補格助詞の敬語形で、日本語の副助詞「は」に相当する助詞の敬語形である。したがって、尊敬主格助詞 kkesō と、尊敬補格助詞 kkesónŭn は区別しなければならない。

4.2 尊敬与格助詞と日本語

日本語にはない韓国語独特の尊敬成分のもう一つに尊敬与格助詞がある。日本語の与格助詞「に」に当たる表現形式が、韓国語では普通形と尊敬形の対立を為すことを意味する。前項の尊敬主格助詞と並んで、現代韓国語の尊敬助詞を代表する特殊なものである。

尊敬与格助詞の形態は kke である。普通与格助詞は ege と hanthe の二つの形態があるが、尊敬与格助詞の形態は一つのみである。日本語には普通形と尊敬形の対立がないので、韓国語の与格助詞は、日本語ではいずれも普通与格助詞「に」で表現するしかない。

このように、形態でもって比較するのはあくまでも表層的な解釈であって、深層的には、述語に敬語形が用いられている場合には普通与格助詞も敬意を内包しているという解釈が可能である。統語的には敬意度の差が付けられることを意味する。次の例を比較してみよう。

(16) a) これをあいつにやれ。

b) これをあの方に差し上げて下さい。

この例の各々の与格助詞は、それぞれ待遇の意味が違うのではないかと考える。このような対立において、もし日本語に尊敬助詞が存在するのならば、素材を高める(16b)のような表現では尊敬助詞を用いるであろうことは容易に想像できるからである。また、逆にそんざい形の助詞が存在するのであれば、「に」を尊敬形として用い、(16a)のような表現ではそんざい形が用いられるはずである。

現代韓国語に用いられる助詞の尊敬形は、以上のものしかないと言える。ただし、尊敬呼格助詞として ishiyō (よ) を立てる場合もあるが、これは詠嘆的な表現でしか用いられない特殊なものである。いずれにせよ、韓国語の助詞は、尊

敬形は存在するけれども、謙讓形は存在しない。これは韓国語の敬語表現が常に受け手を高めるところに重点が置かれ、為手を低めることには関心が寄せられていないという特徴を示してくれるものである。

4.3 尊敬助詞と尊敬補助語幹との相関関係

次に、韓国語の尊敬助詞と尊敬補助語幹との相関関係について述べる。尊敬補助語幹は shi 一つしかないが、今述べたように尊敬助詞は尊敬主格助詞・尊敬補格助詞・尊敬与格助詞が一般に用いられる。その各々の対応を見てみよう。

まず、尊敬主格助詞と尊敬補助語幹との相関関係である。一般的に尊敬主格助詞 kkesö が使われると文末の用言は必ずといっていいほど尊敬補助語幹 shi が用いられる。しかし、shi が使われるからといって必ずしも kkesö を用いなければならないということはない。すなわち、kkesö ほど shi が kkesö の使用を強く要求しはしない。両方を同時に用いた方が敬意が一層高くなることは言うに及ばない。

たとえば、尊敬補助語幹 shi だけが用いられた表現と尊敬主格助詞 kkesö だけが用いられた表現との比較において、前者が後者より座りがいい。後者は落ち着きがなく何となく均衡の取れていない表現となる。その両方を同時に用いる理想的な表現形態は減少しつつある。つまり、従来は誤用とまでされた尊敬主格助詞無し、尊敬補助語幹だけの表現が多用されるようになってきているのが現状であり、尊敬助詞無しの日本語との歩み寄りを感じさせるものである。

次は尊敬補格助詞と尊敬補助語幹との相関関係である。この相関関係は、尊敬主格助詞と尊敬補助語幹との関係と一致するものであり、尊敬補格助詞を尊敬主格助詞と混同して運用する原因にもなるものである。

一方、尊敬与格助詞と述部との関係であるが、kke は与格であるので謙讓表現と呼応する。したがって、受け手に対する尊敬表現と為手の謙讓表現とが同時に考慮されるものである。その傾向は、前記と同様に、kke が謙讓表現を要求するほど、謙讓表現が必ずしも kke を要求したりはしない。なお、尊敬与格助詞と謙讓表現が同時に用いられる理想的な表現は、前記の理想的な表現に比べると、まだ使用頻度が高いけれども、減少しつつあることは確かに観察される。

以上のように、韓国語の尊敬助詞のすべての使用頻度が減少しつつある。これは、現代の敬語運用の単純化現象の一つであり、尊敬助詞無し日本語と同じような傾向を表しているとも言える。つまり、いずれは韓国語の尊敬助詞も古典的な形態としての用法しか持たなくなる可能性がある。

5. むすび

本稿では、日韓両言語の成分添加による尊敬表現を、その尊敬成分の形態を中心に比較考察した。両言語の敬語表現で、尊敬表現が多用される点では共通であるけれども、その形態は極端な対照を成している。

それは、日本語の尊敬成分は非常に多様であるが、韓国語のそれは非常に単純である、という一言に尽きる。用言において、日本語では、動詞・形容詞・形容動詞それぞれに添加する特定の成分を備えているのに対して、韓国語の場合は尊敬補助語幹一つですべてを賄っている。体言においても、日本語では尊敬接辞が多用されるけれども、現代韓国語では一般に用いられない。

しかし、助詞の尊敬形においては両言語の事情が変わり、韓国語だけに発達している。ただし、日本語でも統語的には助詞の敬語性を確かめることはできる。また、韓国語の尊敬助詞の使用頻度の減少から両言語の敬語運用の歩み寄りを予測することも可能である。

【参考文献】

- 『これからの敬語』（1952）国語審議会の文部大臣に対する建議。
 成者徹（1985）『現代國語待遇法研究』，開文社。
 西田直敏（1987）『敬語』，国語学叢書13，東京堂出版。
 文化庁（1978）『「ことば」シリーズ9 言葉に関する問答集4』，大蔵省印刷局。